
泣くコトの理由

さんび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣くコトの理由

【Nコード】

N1593B

【作者名】

さんび

【あらすじ】

僕は一人だ。泣くことは恥だと思ってた。そう、あの少女に会うまでは…。

（前書き）

拙い文章ですが、楽しんでいただけたら嬉しいです。

気が付けばいつも一人だった。

学校に行っても皆、僕から遠ざかっていく。

そのうち学校にも行かなくなり、僕は本当に一人になった。

さらに追い打ちをかけるように両親が死んだ。

交通事故だった。

僕は毎日一人、家で泣き続けた。

一体どれ位泣いていただろうか。

僕はフラリと両親の墓に向かった。

何で行ったのかは分らない。

ほんの気紛れだったのかもしれない。

だが、何故か、行かなければならない気が、した。墓ではなく、

そのバシヨ自体に。

墓地には一人の少女が居た。

両親の墓の前になると、途端涙が溢れてきた。死んだ、死んでしま

った。僕は一人だ。ただそれが悲しかった。

…は…涙なんて、枯れたと思ってたのにな

無機質にそこに鎮座する墓の表面を手でなぞる。涙を拭いて立ち上

がると、先程の少女が傍らに立っていた。少女がおもむろに口を開

く。

「泣くコトは、決して悪いことじゃあり

ませんよ？」

儚い声は今にも消えてしまいそうだ。こちらを見上げる。

「何だ？お前は」

「ご両親がお亡くなりになられたのですね」

僕の言葉を無視して話す。少女の瞳には凜とした強さが浮かんでいた。

「だったら気が済むまで泣けばいいのです。涙が枯れ

るまで、泣けばいいのです」

こちらの質問にはまつく応えない。僕は次第にイライラとし始め些
か強めにもう一度少女に問うた。

「質問に答えろ」

「強がっていると、やがて本当に泣くことを忘れてしまいますよ…？」

カッと、頭に血が上った。

「黙れ！」

気が付いたら叫んでいた。

「お前に何が分かるんだ！友も知り合いも親も全て失った悲しみがお前に分かるのか！！」

僕の叫びは満月の浮かぶ夜空に溶けていった。肩を上下させながら少女の目を睨む。

「悲しみなら分かるつもりです。私は、自分も、失ったから」

ひどく悲しい顔で笑い、少女は僕の手を握る。スルツと、少

女の手は僕の手を擦り抜けた。「！？」

「私は事故で私を失った。だから私はもう泣けません。泣きたくても、幽霊は涙を流せないから」

優しい、悲しい声だった。

「貴方は、泣くことの理由って考えた事ありますか？私は、人の心を忘れない為だと思います」

風が、少女と僕の髪を撫でた。

「私は既に人

では有りません。泣けないから、泣く感覚を忘れてしまったから」言葉を切って、目を合わせる。引き込まれそうな瞳。

「私は私の様な悲しい人を増やしたくない。だから思いつきり泣いて下さいね」

少女の胸元で、赤いリボンが揺れた。

気が付くと、僕はベッドの上だった。直ぐに体を起こすと、見慣れた僕の部屋。

「……夢…？」

まだぼんやりとする頭を振って何気なく窓に目を向けて。

瞳から、涙が零れるのが分かった。僕の首には、赤いリボンが結ばれていた。風に揺れた、名も知らぬ少女のもの。

「ありがとう……」

安心して。僕はまだ涙を流せているよ。涙を流せない、キミの分まで……。

（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。今後ともよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1593b/>

泣くコトの理由

2010年10月11日02時28分発行